

働きたい

がんと就労

1

「がん患者が、治療しながら就労できる会社をつくりたい」

昨年8月、大津市内でがん患者らが開催した集会。約250人の参加者を前に、乳がんや子宮頸がんなどと闘う大津市の会社経営、**多田勢津子**さん(53)は、こんな一文を書いたメッセージボードを掲げた。

2008年12月、瀕死の状態です内の病院に搬送された。以前から左胸のしこりや変色に気付いていたが、痛みは無く、育児や仕事の忙しさもあって家族には伝えていなかった。がんを疑ったこともあったが、入浴時に鏡を湯気で曇らせたり、医療関係のニュースを見ないようにしたりして、気付かないふりをしていったという。

抗がん剤や放射線治療などの効果があり、一命

患者同士支え合い 起業目指す



がんと闘いながら働く**多田勢津子**さん。がん患者が働ける会社の起業を目指している＝大津市で

社会とのつながり求め

ながっているという実感が湧く。「仕事を続けることで社会に少しでも貢献できている」という気持ちになれる」

をとりとめた。現在は、早朝から午後10時ごろまで会社事務所のソファに体を預けて事務仕事をしている。薬の副作用がきつい日もあるが、社員に毎日かける「いってらっしゃい」と「おかえり」のあいさつで、社会とつ

ながっているという実感が湧く。「仕事を続けることで社会に少しでも貢献できている」という気持ちになれる」

事内容の変更を申し出られずに会社を辞めたりする人もいる。そこで考えついたのが、患者らが互いに勤務時間を軽減し合いながら働ける新会社を起すことだ。「社員が皆、がんを経験していれば互いに気遣うこともできる。働ける場所ができれば、高額な医療費の負担軽減にもつながる」。雑貨販売もするカフェなどのアイデアをノートにまとめており、現在、支援者を探

している。
多田さんは、自身の経験を振り返りながら、こう訴える。「がんが理由でできなくなることは、確かにあるかもしれない。でも、がんになったというだけで、働くことをあきらめないでほしい。あなたが持っている能力全てが損なわれたわけではないんだから」

事を持ちながら治療のために通院している人は約32万人に上る。医療技術の進歩で患者の生存率が年々高まり、がん患者の就労が珍しいことではなくなっているのに、行政や企業などの支援策は現在、十分とはいえない。がんと闘いながら働く人たちが、そして支援のあり方を模索する関係者の動きを追った。(この連載は村松洋が担当します)